

本書を執筆するにあたって

書名を『Bird's-eye 総合英語』としたのは、文法項目を個別に説明するだけでなく広い視野で統一的に説明したいと考えたからです。Nexus の概念を拡大して名詞句（節）にも拡大したり、「法助動詞」の用法を原義にさかのぼり基本用法と推量用法の2用法として説明をしたり、「時制」を tense と aspect の概念で整理したり、not either A or B を「ド・モルガンの法則」で説明したり、have や get をその能動性の違いから説明したのも、広い視野での統一的な説明の企みです。また「同等比較」<A is as～as B.>を $A \geq B$ と説明したり、仮定法が「事実と反する仮定のみではない」ことに言及したり、I wish I were a bird. の制約などを説明したのは、新しい言語学の知見を取り入れたかったからである。ここではその一端を紹介したい。

1. 時制(テンス)とアスペクト(相) p.56

現在形・現在完了形・現在進行形・現在完了進行形は基本的に「現在形」という理解を生徒に徹底するためには、tense と aspect という概念を教えるのが効果的である。また tense と time の違いを動詞の語尾変化という尺度で説明すれば、英語に未来形がないことにも納得がいく。その結果、未来を表す表現形式 (will, be going to, 現在形 現在進行形、未来進行形, be to ...) が多様であることにも理解が及ぶはずである。

2. may well…って「～するのも無理はない」? p.91

文法問題集などには判で押したように may well = 「～するのも無理はない」と成句のように記載されているが、英英辞典には成句の記述がない。英語の native は法助動詞の may に「十分に」の意味の副詞 well がくっついていると捉えている。may は①基本用法「～してもよい」②推量用法「～かもしれない」なので、副詞の well を伴うと「たぶん～だろう」という推量の意味で一番よく用いられる。could well 「難なく～できる」なども同じ理屈である。

3. 法助動詞の使い方をまとめたら… p.88, 92, 96, 102, 108

can, may, must, will...などの法助動詞を個別に説明し始めると、次から次へと色々な用法が出てきて生徒は混乱する。そのうえ法助動詞の直説法過去形と仮定法過去形が出てくると混乱は一層深まる。本書では全ての法助動詞を基本用法と推量用法に分けてその原義から説明し、あわせて過去を表す形式を対応させた。法助動詞＋完了形は法助動詞の過去形ではなく、過去の出来事の実現可能性を現在から推量しているに過ぎないことを説明した。

4. must「違いない」vs. should「はずだ」 p.109

推量用法の must 「～に違いない」と should 「～のはずだ」違いは確信の度合いの差だけではない。そもそも「推量の方向性」が異なるのである。ふつう推量には2つの方向性がある。＜原因→結果＞の方向と＜結果→原因＞の方向である。must はどちらの方向性の推量にも用いられるが、should は＜結果→原因＞の方向性の推量には用いられない。このことは日本語「～に違いない」「～のはずだ」にも当てはまる現象である。

5. 使役動詞<have + O + 原形>と<get + O + to do>は意味が違うって本当? p.142

「人に～させる」の意味の have + O + 原形と get + O + to do の使い分けは紛らわしい。to 不定詞は「～の方向に向けて」の意味で、「人に～させる」には時間がかかることが暗示されている。それゆえ get は相手が嫌がる行為を時間をかけて説得して「～させる」のに対して、have は原形を伴うので、必ずしも相手が嫌がらない行為を約束事に基づいて指示して「～させる」（時間をかけずに）という違いがある。原形にも to 不定詞にも意味の違いがあるのである。

6. 「財布を盗まれる」<have my wallet stolen>それとも<get my wallet stolen>? p.175

<get my wallet stolen>は get の意志性を反映して主語に「責任」がある場合に用いられることが多い。<have my wallet stolen>は have の受動性を反映して主語の「被害」が強調される。get は「努力」を暗示し、have は「状況を受け入れている」のニュアンスを持つ。それゆえ、命令文では get のみ用いる。

・ The boy got his fingers caught in the door. (男の子は(不注意で)ドアに指を挟まれた)

7. <as ~as...>は「同じくらい〜だ」の意味じゃないって、そんなバカな… p.224

参考書で触れるべきか触れざるべきか迷った項目である。きっかけは $A \text{ is not as } \sim \text{ as } B. = A < B$ 「A は B ほどには〜でない」なら、論理的に $A \text{ is as } \sim \text{ as } B. = A \geq B$ 「A は少なくとも B 並みに〜だ」ではないかという生徒たちの質問だった。ALT に質問しても「A と B とは同じ」の意味だという。質問の仕方を変えた。「A is as tall as B, perhaps shorter. と言えるか?」と尋ねると、彼らはニッコリして You are as smart as me, perhaps smarter!

8. after all は「結局」という意味じゃないの? p.297

英文学の問題集を使っていると、日本語訳や解説の中に「after all = 結局」という説明によく出くわす。after all の位置や文脈からみて①「(いろいろあったけど) 意外にも結局は」の意味で用いられる場合もあるが、②「(意見を述べた後で) だって…だから」の意味で用いられることが圧倒的に多い。特に文頭で用いられていたら②「言い訳」の意味で用いられる。誤解が生じる理由は「結局」という日本語はどんな意味にも解釈される便利な言葉だからだ。

9. 未来表現を統一的に眺めてみると p.454

未来を表す表現を「予定」「意志」「予測」に分けて説明した。従来の「単純未来」「意志未来」という区分だと現在進行形や現在形を用いた予定「〜することになっている」をうまく説明できなくなるからだ。そもそも未来形は存在しないのだから、未来を表す表現には多様な表現形式が存在するはずである。その未来表現を「予定」「意志」「予測」に分けたのが今回の工夫の一つとなっている。大きな枠組みを提供することで生徒の理解が進むと信じている。

10. 時や条件の副詞節で用いられる推量用法の will とは? p.459

主節が未来形の時、「時や条件を表す副詞節」では未来を表す推量用法の will は用いられないが、「理由や譲歩を表す副詞節」では will は使用可能だ。もちろん、意志を表す will や be going to は使用可能だ。しかし、B, if A (B が先に起こって A がその後起こる) の場合、推量用法の will は用いられる。<I will stop drinking if it will be good for my health. (健康によさそうなら禁酒するよ)>

11. I wish I were a bird.はどんな時に使えるのか? p.251, p.472

I wish の後に仮定法動詞を使うかそれとも助動詞の would を伴うかはちょっとした盲点です。基本例文として覚えた I wish I were a bird.はどういう場面で用いられるかという問題です。結論から言うと、「習慣や状態」を望む場合には動詞の仮定法形を用い、「その場の1回限りの動作」を望む場合には would を用いるのです。もちろん、この would は意志を表しますから I wish...の後に I would...は用いられません。自分でどうにでもなるからです。